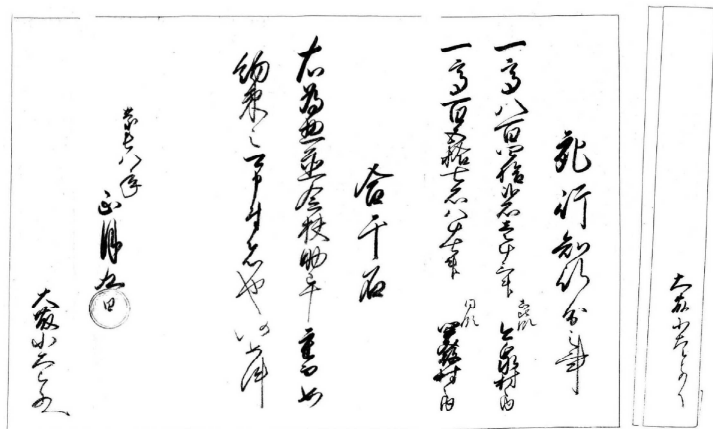


だいとう
大藤小太郎の足跡をたどる

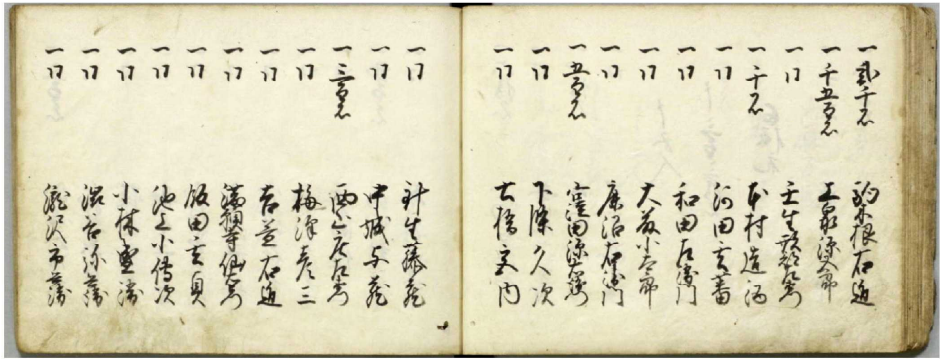
矢内昭夫
Yanai Akio



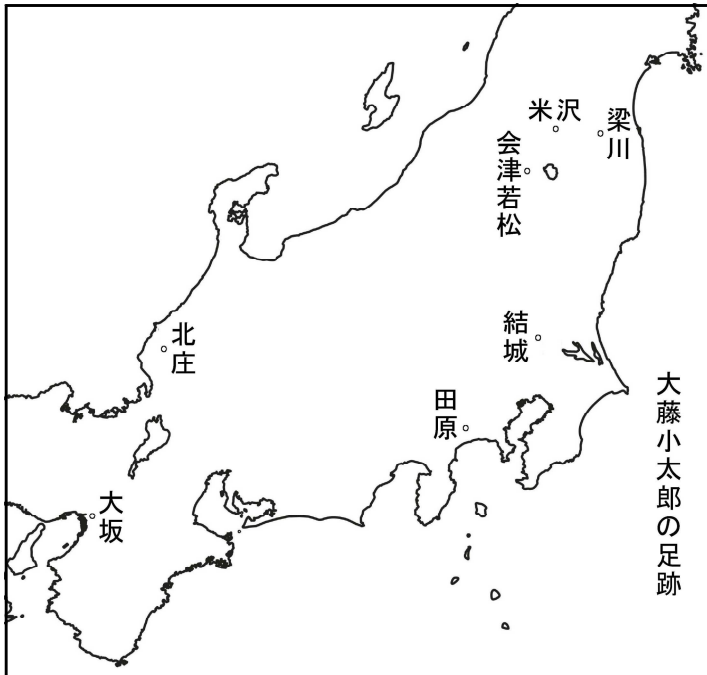
慶長八年大藤小太郎宛結城秀康知行宛行状
東京大学史料編纂所影写本

会津御在城分限帳

米沢市立米沢図書館蔵



↑
大藤小太郎



はじめに

はだ の 秦野盆地の北側には丹沢^{たんざわ}の美しい山並みが連^{つら}なります。今から四百数十年前、その麓^{ふもと}に中^{なか}郡^{ごおり}郡代大藤^{だいとう}氏の城館が建っていました。初代の金谷齋^{きんこくさい}は紀州根来寺^{ねごろ}の出身と伝えられ、軍記物では後北条氏の軍師^{ぐんし}として登場します。大藤氏の菩提寺^{ぼだいじ}となる香雲寺^{こううんじ}の前身^{しゅんそういん}春窓院はこの金谷齋の創建ではないかと思われます。金谷齋^{きんこくさい}に苗字^{みょうじ}はなく、大藤^{だいとう}を名乗ったのは次の世代からでした。

金谷齋のあとには末子^{ばっし}の秀信^{ひでのぶ}が継ぎました。曹洞宗^{そうとうしゅう} 叟^{がつく}派四世^{そう}の實堂宗梅^{じつどうそうばい}を田原^{しょうへい}に招^{しょう}聘^{へい}して香雲寺を開いたのはこの秀信です。秀信は武田信玄への援軍を指揮して遠^{とお}江^{とうみ}(静岡県西部)二俣^{ふたまた}に派遣され、その地で鉄砲にあたり命を落としました。なお、秀信が後に北条氏政から一字^{はいりょう}を拝^{まい}領^{のぶ}し政信と名乗ったという説が提唱されています。そうすると三代目の実名も政信ですから、政信が二代続いたことになります。江戸時代初期^{かんえい}の寛永6(1629)年に鑄^{ちゅう}造^{ぞう}された香雲寺梵鐘^{ぼんしょう}には「先領主当寺檀那^{だんな}」として政信ではなく秀信の名が刻まれています。

二代目秀信、三代目政信とも「式部^{しきぶ}」という官途^{かんと}を通称とし、諸足輕衆^{しょあしがる}の大將、いわば後北条氏の即応実戦部隊^{そくおう}の指揮官として各地の合戦^{ごうみょう}で高名^{こうめい}を重ねました。

四代目の実名はわからず、大藤氏の家督継承^{かどくけいしやう}予定者が代々名乗ったとみられる与七^{よしち}という仮名^{けみょう}(通称)で文書に登場します。豊臣秀吉の大軍を迎え撃った小田原合戦では、この大藤与七が伊豆韮山^{にらやま}

に^{ろうじょう}籠城した北条氏^{うじのり}規を補佐して戦いました。このときおそらく年齢はまだ二十代ではなかったかと思います。

田原^{たわら}を本拠地とした大藤氏はこの与七の時代に^{しゅうえん}終焉を迎えます。その後、大藤氏^{そうけ}宗家の文書類を継承したのは、越前藩士^{えちぜん}の大藤家^{だいとう}でした。同家文書に与七の次の代とみられる大藤小太郎^{だいとう こ たろう}の名前があります。与七とは兄弟または同一人物の可能性もあるのではないかと考えています。『新編相模国風土記稿^{しんぺんさがみのくに ふ ど き こう}』にも^{けいちょうねん}慶長年間に大藤小太郎が香雲寺の修復について指示した書簡が掲載されています。

この大藤小太郎については地元でもあまり知られていないのではないかと思います。そこで、北条氏滅亡後の大藤小太郎の^{そくせき}足跡をたどってみることにしました。

目 次

大藤小太郎、会津の上杉家に仕官する	4
大藤小太郎、加勢として梁川城に派遣される	6
伊達政宗と戦った大藤小太郎	8
上杉景勝から梁川城の大藤小太郎らに慰労の酒肴が届く	10
大藤小太郎、上杉家を離れ、結城秀康に召し抱えられる	12
越前での大藤小太郎	14
大藤小太郎、大坂夏の陣で討死す	16
西田原香雲寺に建てられた大藤小太郎の供養墓	18

大藤小太郎、会津の上杉家に仕官する

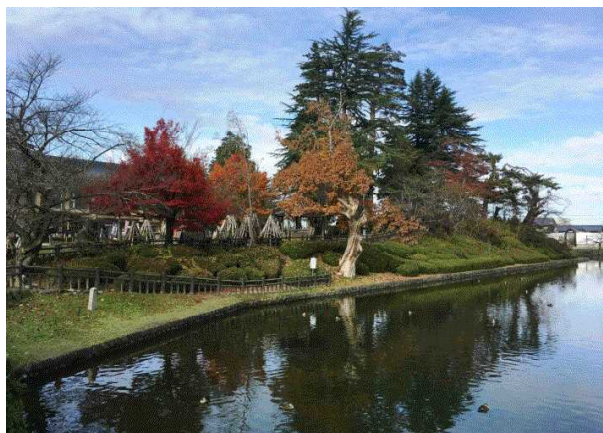
天正^{てんしょう} 18(1590)年7月、若き大藤^{だいとう}氏の当主与七^{よしち}は、北条^{ほうじょう}氏直^{うじなお}からの朱印^{しゅいん}状^{じょう}を手^てにします。豊臣^{とよとみ}秀吉^{ひでゆき}によって仕掛^{しかけ}けられた小田原^{こ田原}城^{せい}攻^{こう}圍^い戦^{せん}が北条^{きたじょう}氏の降^{こう}伏^{ふく}で終結^{しゅうけつ}した直^{ちき}後^ごのことです。そこに書^かかれていたのは、この度^{たび}の伊豆^{いず}韮^{にら}山^{やま}における籠^{ろう}城^{じょう}戦^{せん}での与七^{よしち}の働^{はたら}き^きを讀^{よみ}え慰^い勞^{ろう}することばでした。それに続^つけて、「今^{いま}より以^い後^ご、何^{いづ}方^{かた}になりともこれ有^あるべき儀^ぎ、相違^{そうい}あるべからざるものなり。」とありました。これからは、北条^{きたじょう}氏^しを離^{はな}れ、どこで暮^くらしても、誰^たに仕^{つか}えても良^よいとい^いうこと^{こと}です。この朱印^{しゅいん}状^{じょう}は、徳川^{とくがわ}家^け康^{やす}の次男^{ゆうき}結城^{ゆうき}秀^{ひで}康^{やす}を藩祖^{はんそ}とする越前^{えちぜん}藩^{はん}に仕^{つか}えた大藤^{だいとう}家^けに伝^{でん}えらたものです。与七^{よしち}のその後の消息^{そくし}はわかりません。

大藤^{だいとう}文書^{もんじょ}には北条^{きたじょう}氏^し時代^{じだい}のものがかなり含まれていて、『戦国^{せんごく}遺文^{いぶん} 後北条^{ごきたじょう}氏^し編^{へん}』にも収録^{しゅうろく}されています。同家^{どうけ}文書^{もんじょ}で与七^{よしち}の次^{つぎ}に名前^なが確^{かく}認^{にん}できるのは大藤^{だいとう}小太郎^{こたろう}です。関ヶ原^{かんがはら}合戦^{ごうせん}の3年後^ご、慶長^{けicho} 8 (1603)年^{ねん}の日付^{ひふ}で、結城^{ゆうき}秀^{ひで}康^{やす}が小太郎^{こたろう}に知行^{ちぎよう}千石^{ごく}を宛^{あて}がうというものです(「結城^{ゆうき}秀^{ひで}康^{やす}知行^{ちぎよう}宛^{あて}行状^{ぎょうじょう}」)。文言^{もんごう}に「約束^{やくさく}のごとく」とありますので、これ以前^{いぜん}に秀康^{しゅこう}と小太郎^{こたろう}の間^まになんらかの契^{けい}約^{やく}があつたよう^{よう}です。『福井^{ふくい}藩史^{はんし}話^わ』には「結城^{ゆうき}において秀康^{しゅこう}公^{こう}へ召^{めし}抱^かへられ、越前^{えちぜん}において千石^{ちようだい}頂^{てい}戴^{だい}す。」とあります。これが正しいとすれば、秀康^{しゅこう}がまだ結城^{ゆうき}にあつた慶長^{けicho} 6 (1601)年^{ねん}に、仕官^{しかん}の約^{やく}束^{さく}が交^かわされたこと^{こと}になります。さきにみた与七^{よしち}と小太郎^{こたろう}の関^{かん}係^{けい}はわかりませんが、世代的^{せだいてき}にみて同一^{どういつ}人物^{にぶつ}の可能性^{かうねいせい}も考^{かんが}えられ^れます。包圍^{ほうい}戦^{せん}の末^{すえ}に小田原^{こ田原}城^{せい}が開^{ひら}城^{じょう}してから慶長^{けicho} 6 年^{ねん}まで11年^{ねん}の歳^{さい}月^{げつ}が流^{なが}れていま^{いま}す。この間^{かん}、小太郎^{こたろう}はどこでどのよう^{よう}に過^{すご}ごしていま^{いま}したのでし^しょうか。

それを知る手掛^{てが}かりは山形^{やまがた}県^{けん}の米沢^{よねざわ}図^ず書^{しょ}館^{かん}にありま^ました。米沢^{うえずぎし}は上杉^{あがし}氏^しの城^{じょう}下^げ町^{まち}です。同館^{どうかん}所有^{しゅいう}の『会津^{あいづ}御^ご在^{ざい}城^{じょう}分^{ぶん}限^{げん}帳^{ちやう}』に「千

石 大藤小太郎」と書かれていました。こちらも千石です。最初は、同名異人の可能性も疑いましたが、別の資料で、「唯今越前に居りただいま お候 大藤小太郎」が一時期、上杉家かちゆう中かなざわ こせきしにあって合戦に参加していたことが語られています。(『金沢古蹟志』巻12「青木頼母伝話」)。この話に間違いがなければ、上杉家かみすぎ かちゆう中えちぜんの小太郎と越前えちぜんの小太郎は同一人物とみて良いと思います。

慶長3(1598)年、上杉景勝うえすぎかげかつは豊臣秀吉の命により、120万石に増され、越後えちごから会津あいづに転封てんぽうになりました。関ヶ原合戦の2年前です。移封後、執政直江兼統いほう しつせいなおえ かねつぐは会津を中心に領国の防衛強化をはかり、多くの牢人ろうにん(浪人)衆を集めています。大藤小太郎もそのうちのひとりだったようです。『分限帳』には、与板衆ぶげんちゆうとあり、兼統直属であったことがわかります。それにしても千石は破格はかくです。実戦経験を評価されてのことでしょうか。「若輩じゃくはい」(天正17年12月北条家朱印状)と言われながらも、北条氏規うじのりの副将としてにらやま葦山あしやまで籠城戦ろうじょうせんを戦い抜いた与七と小太郎が重なって見えます。



米沢城の堀

大藤小太郎は会津へ移る前、直江兼統の領地となった米沢に一時滞在しました。

大藤小太郎、加勢として梁川城に派遣される

慶長^{けいちょう} 5 (1600)年、何月かは不明ですが、直江兼統^{なおえ かねつぐ}のもとにあった関東牢人^{ろうにん}のうち大藤小太郎^{だいとう こ たらう おも だ}ら重立った者^{うえすぎかげかつ きん} 8名は上杉景勝^{とうがわいえやす}より近侍^{きんじ}を命じられ、米沢から会津に移りました。徳川家康との関係が悪化し、いわゆる「会津征伐^{あいづ せいぱつ}」が間近に迫っていたことです。

上杉方は、家康^{くみ}に与^{だて}した伊達・最上^{も がみ}などの周辺大名や関東から襲来するであろう家康率いる本隊^{ひき}への備えとして、支城や防塁^{ぼうるい}の整備、兵力の増強を急ぎました。そのうち、伊達政宗^{だ て まさむね}への備えとしたのが、白石城^{しろいし}・福島城^{ふくしま}・梁川城^{やながわ}です。会津で上杉景勝^{きん じ}に近侍した小太郎はさらに梁川城へ加勢^{か せい}として派遣されます。梁川城は伊達氏^{はつしやう}発祥^{む つ}の地陸奥国伊達郡^{だ て ぐん}にあり、須田大炊長義^{す だ おおい ながよし}を城代^{じやうだい}として守りを固めていました。梁川町史編纂室蔵^{へんさんしつぞう}の一紙文書^{いっし}には、会津からの加勢^{か せい}として、築地修理^{ついで じしゆり}、角屋太郎左衛門^{かくまたん ば}、先方衆として、「千石 車丹波^{せんしやたんぱ}」「同 大藤小太郎」らの名があります。

余談ですが、ここに小太郎と同列で名前がみえる車丹波守^{たんばのかみ}はかつて常陸^{ひたち}の佐竹義重^{さたけよししげ}の側近でした。上杉への助力のため送り込まれたとも言われています。関ヶ原戦後には常陸に戻っていたようです。常陸の佐竹氏は、上杉に通じ関ヶ原に参戦しなかったということで、慶長7 (1602)年、常陸54万石から出羽秋田^{で わ}18万石への減石^{い ほう}移封^{いっ き}になりました。車丹波はこれに反発して一揆^{いっ き}を企てたため、水戸で磔刑^{たっけい}に処せられたとも、斬首^{ざんしゆ}されたともいわれています。

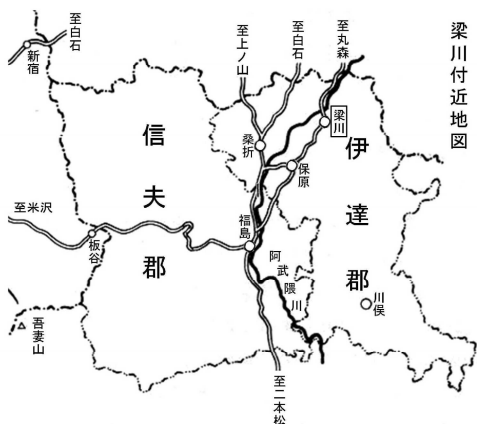
話を戻します。慶長5年7月21日、徳川家康は会津に向けて江戸城を発しました。同月24日、下野国小山^{しもつけ おやま}に到着したところで、石田三成^{いし だ みつなり}らが挙兵^{きよへい}したとの一報が届きます。通説では、ここで諸将を集めての「小山評定^{こやまひやうじやう}」が行われたとされています。評定の

結果、26日以降、諸大名はUターンして次々と西^{せいじょう}上していきま
した。家康は、上杉へのおさえとして次男の結城秀康^{ゆうきひでやす}を宇都宮^{うつのみや}に残
します。合戦終結後、大藤小太郎はこの結城秀康に仕えることにな
ります。

このころ、伊達政宗は家康の命を待つことなく、刈田郡白石城（宮城県白石市）を攻めてこれを落としています。7月25日のことです。白石城将甘粕景継の白河口（会津若松とも）出張中の隙をついての攻撃でした。

政宗が次に狙うのは福島城、梁川城です。8月に入り、梁川城を守る将士から直江兼続のもとに、政宗来攻の風聞ありとの報告がなされました。同月13日付けで、兼続がこれに、「もしそのようなことがあれば自ら後詰めを仕りこれを討ち果たすべし」と返書しています。宛名に記された7名は、順に、横田大学・車丹波守・金子美濃守・築地修理亮・角屋太郎左衛門・大藤小太郎・須田大炊介でした。（木村徳衛『直江兼続伝』）

このあと、9月3日付け兼続から福島城代本 庄 繁長宛の書簡には、伊達政宗から「降伏」の文書を受け取ったことを示す一文があります（梁川町史6）。政宗の「降伏」はにわかには信用できませんが、あるいは上方の戦況を確かめてから次の行動に出ようとする思惑があったのかも知れません。家康が必ず勝利するとの確証はなかったはずですから、この怪しい「降伏」は家康方（東軍）が敗北したときに備えた一種の保険だったともみられます。



伊達政宗と戦った大藤小太郎

直江兼統は、徳川家康との直接対決が回避されたことと前述した伊達政宗の怪しげな「降伏」申し出もあり、最上領への侵攻を開始します。上杉勢は、9月12日から17日にかけての激戦で、最上方の多くの出城を陥落させ、最上義光の居城山形城に迫ります。しかし、ここで義光の要請をうけた伊達の援軍が参戦してきました。さらにこの月15日に行われた関ヶ原合戦での西軍敗北の報が届きます。兼統は、間髪を入れず米沢への引きあげを敢行しました。この時の撤退戦で、殿をつとめ、追いつめる最上勢を蹴散らす働きを見せたのが前田慶次でした。慶次は前田利家の親族ですが、利家のもとを出奔して上杉家に召し抱えられていたのです。テレビドラマにもなっているので御存知の方も多と思います。慶次の上杉家での俸禄は大藤小太郎と同じ千石でした。

伊達政宗は、関ヶ原での東軍の勝利に力を得て、旧領の自力奪還に闘志を燃やします。10月6日、2万ともいわれる大軍を催し白石城を出発、福島城に迫りました。福島城将本庄繁長は籠城を覚悟しますが、繁長の子義勝は果敢に出撃をはかって激しい戦闘となりました。この戦で、両軍に多数の戦死者が出たということです。

政宗本隊は転進して信夫山の麓に本陣を構えました。この情報を得た梁川城代の須田長義は加勢の諸将とともに出陣し、阿武隈川を渡り伊達軍の背後をつきます。伊達軍はおもいもよらぬ奇襲に大混乱となりました。「須田系譜」(梁川町史6)の長義の項に、この奇襲のことが記されています。「政宗後陣を襲い、遂に小荷駄・陣具・竹に雀の紋幕、及び看経幕、黄糸を以て縫った法華経廿八品」を戦利品として奪い取ったとあります。

上杉と伊達のこの戦いは、当時信夫山の南麓を流れていた松川付近で行われたことから「松川の戦い」とよばれています。この合

戦について、後年編纂された『伊達郡誌』は次のように伝えています。

・ ・ ・ 片倉景綱、伊達成実、浜田治部其他の諸軍七千余騎を部諸し、進んで阿武隈川辺に陣す。又、梁川城には須田長義城将として年まさに二十三歳の血氣盛なるに加へ、六月初旬、横田大学鉄砲百挺を以て来援し、佐竹よりも車丹波守来り、又鬼生田大膳、金子美濃、大塔小太郎等も来りて加勢し、総勢二千余騎、政宗等来ると聞き、進んで大枝村に迎撃し流れを乱して血戦す。政宗大敗、死傷非常に夥だしく、河水為めに赤しと云ふ。政宗漸く血路を開きて白石に逃れ・ ・ ・

一部読点を補い、旧字を常用漢字またはひらがなに直してよみやすくしてあります。なお、文中にあるように、軍記物や郡誌などの編纂物では大藤小太郎を「大塔小太郎」と表記したものがいくつかみられます。

結局、政宗は福島城攻略を断念し、翌7日、白石を経て北目城(仙台市太白区)に帰城しました。しかし、旧領回復の野心は捨てきれず、このあとも何度か上杉領へ兵を差し向けます。

上杉家



伊達家



両家ともに「竹に雀」の家紋です。松川の戦いで大藤小太郎が属した梁川勢は、右側の紋が染め抜かれた伊達家の陣幕を戦利品として分捕りました。

上杉景勝から梁川城の大藤小太郎らに慰労の酒肴が届く

10月16日付け^{な お え かねつぐ}直江兼続^{やながわ}から梁川城の諸士^あに宛てられた書状には、伊達方への内応^{ないおう}が発覚^{はっかく}した横田大学を会津若松へ送ること、町人・百姓でも不審^{ふしん}なものは若松へおくべきこと、梁川城代の須田長義^{す だ ながよし}家中からも証人^{ひとじち}（人質）をとることなどが書かれています（木村徳衛『直江兼続伝』）。宛名^{あて な}は、順^{だいとう}に大藤小太郎^{こ た ろ う}、築地修理亮^{つい じ しゆりのすけ}、金子美濃守^{かね こ み の かつみ}、車^{くる}丹波守^{またんぱのかみ}の4名です。関ヶ原の合戦が東軍の勝利で決着してからひと月になりますが、上杉と伊達^{いくさ}の戦^{いくさ}はまだ終わっていません。

ここに紹介した兼続書状の宛名のひとり金子美濃守の子である六右衛門^{ゆう き ひでやす}ものちやはり結城秀康^{えちげん}に召し抱えられて越前におりました。同家は美濃守宛^{あて}の上杉景勝^{うえすぎかげかつ}・直江兼続^{な お え かねつぐ}などからの書状を何通か所持していたようです。明治初年に作成されたとみられる大藤系図^{だいとうけいず}の^そ小太郎の項にこの金子六右衛門家に伝わった上杉景勝の書状が引用されています。内容をすこし読みやすく書き下して次に記します。

わざわざ^{もう}申し遣^{つか}わし^{そろ}候。その元、長々^{ざいばんくしん}在番苦身^{しん}にて、いよいよ油断^{ゆだん}なく堅固^{けんこ}の仕置^{しお}き申しつくべく候。この樽^そ肴^{たろ}遣^{たろ}わし^{たろ}候条^{しょうがん}、賞^{しょう}翫^{くわん}せしむべく候。なお使者^{なのおが}申すべく候。

十二月廿日 景勝（花押）〔尚々書きは省略〕

宛名は、筑地^{つい じ しゆりのすけ}（築地）修理亮^{だいとう}、大藤小太郎^{こ た ろ う}、金子美濃^{かね こ み の}入道^{にゅうどう}の三名になっています。慶長5年もおしつまった12月20日、伊達に備えて長期にわたり梁川城^{ざいばん}に在番^{しょうし}する将士^{ゆだん}に油断^{いまし}を戒めるとともにねぎらいの樽酒^{たろざけ}・肴^{さかな}が上杉景勝^{うえすぎかげかつ}から届けられたのです。文字通りの陣中^{じんちゅう}見舞^{みまい}でした。この段階でもなお、伊達との間^わに和議^{わぎ}はなく、緊張が続いていたことが伝わります。

大藤系図では、書翰^{しょかん}の引用に続けて、「右の書翰^{ふしん}不審^{とう}につき、東都^{とう}田畑^{とたばた}先生に問う」としています。北条家^{ほうじょうけ}に仕えていたはずの大藤小太郎に、なぜ上杉景勝からこのような内容の書翰が送られたのか不審であるということです。

大藤家から問い合わせをうけた「東都の田畑先生」からの回答は^{しょうじゅつ}詳述^{しょうじゅつ}はしませんが、全く的外れなものでした。

大藤家の子孫は小太郎が一時期上杉家に仕え、梁川城^{やながわ}にあって伊達勢と戦った事実を一切知らなかったようです。あるいは、あえて小太郎（または大藤家）はこのことを語らなかったのかもしれませんが。家康に敵対した上杉方^{いっさい}について伊達と戦ったことは^{ほま}誉れとみても良いかとおもいますが、やはり徳川への^{はばか}憚りがあったのかもしれませんが。結城秀康はもちろんこの経歴を承知し、それを評価して、上杉家と同じ千石という^{ろくだか}禄高で小太郎を召し抱えたのだと思われます。

同年12月25日、上杉景勝は^{うえずぎかげかつ}本多正信^{ほんだまさのぶ}、^{さかきばらやすまさ}榊原政^{すす}らの勧めに応じて、家康との和議を進めることとし、^{ほんじょうしげなが}本庄繁長^{ほんじょうしげなが}を上洛させます。和睦のための交渉^{なんこう}は難航したようです。翌慶長6(1601)年7月、景勝は^{なおえかねつぐ}直江兼続^{なおえかねつぐ}らを従えて会津を^{ふしみ}発し^{ふしみ}、伏見の上杉邸に入りました。このとき、結城秀康が同行したとも言われていますが、確かではありません（結城市史 第4巻）。



大藤小太郎、上杉家を離れ、結城秀康に召し抱えられる

けいちよう
慶長6(1601)年8月16日、上杉景勝は直江兼続を伴って大坂
おもむ 城に赴き、とよとみひでより 豊臣秀頼にあいさつ 挨拶を済ませたのち、徳川家康と会見し
ました。その後申し渡されたのは会津120万石から米沢30万石への
げんごく 減石転封です。かいえき 改易を免れ、まぬが ともかくも家名の存続は許されま
した。これは、家康のちえぶくろ 知恵袋といわれたほんだまさのぶ 本多正信と家康・秀忠
いちもく も一目置いたとされるゆうきひでやす 結城秀康のあっせん 幹旋によるものといわれていま
す。

上杉家の石高は四分の一に減らされましたが家臣団はいちよう 一様に三
分の一のげんごく 減石にとど 留められています。そのかわり、にゅうほう 会津入封当時に、
新規にかか 召し抱えられた将士のほとんどは召し放ちです。大藤小太
郎もそのひとりですが、小太郎はこれより前に上杉家を離れたとみ
られます。おそらく上杉と徳川のわぶく 和睦交渉が行われていた時期か
と思われます。

大藤小太郎がめ 結城秀康にかか 召し抱えられたのは、慶長6年、結城に
おいての事です(前述)。秀康はいほう 上杉家の移封が伝達された8月の
時点では、もう結城を離れていました。秀康はうつのみや 終始宇都宮にあっ
ておさ 上杉勢関東進出の抑えの役目をはたした功により、慶長5年12月、
えちぜん 越前67万石へのかぞうてんぼう 加増転封になっていたのです。

この前後の秀康の動向について、江戸時代に編纂された福井藩の
こくじそうき 正史『国事叢記』からたどってみます。宇都宮から結城にきじん 帰陣し
たのが、慶長5年の10月で、その後しばらく江戸にふし 滞在したのち伏見
のぼ 上っています。翌6年2月、家臣のほんだ とみまさ 本多富正を伏見から越前に派
遣し、北庄城受け取りと移転の準備にあたらせました。その後、い
つかはわかりませんが、一旦、結城に帰っています。秀康が大藤小
太郎を召し抱える約束をしたのはこのころではないでしょうか。

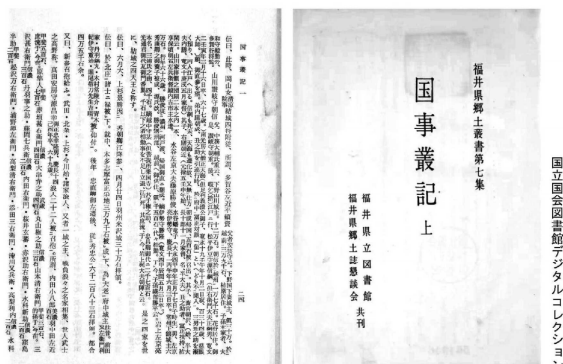
同年5月、秀康はおおつ 伏見に向かい、そこからつるが 大津、敦賀を経たのしょう 北庄

(のち福井)に入ったということです。また、同書は「雑談に^{いわ}日^く」として、「七月、上杉景勝同道上^{うえすぎかげかつどうどうじょうらく}洛、直に御入国」とも記しています。前年には、白河口をはさんで対峙^{たいじ}した秀康と景勝ですが、両者にある種の信頼関係が生まれていたことがうかがえます。

越前に入った秀康は、直ちに家臣の知行割り、城下町の建設などの領国経営に乗り出します。家臣団についていえば、結城旧来の家臣だけではとうてい越前67万石を切盛りするには足りないため、新規の召し抱えが行われました。『国事叢記』に、当時の状況が次のように記されています。「新参召し抱え給ふ。武田・北条・上杉・今川はじめ諸家浪人、又は一城の主、戦負け浪々の名家相集い、世人武士の高野と称す。」

大藤小太郎が越前に入った時期は不明です。小太郎には息子がいました。金三郎(のち金左衛門)といます。実は小太郎より前に結城秀康から父とは別に三百石の知行^{ちぎょう}を与えられています(大藤文書)。慶長6年9月9日付けですから、秀康の越前入部の直後ということになります。金三郎の方が先に越前に赴いたということでしょうか。

金三郎は大小姓として大坂両度の陣にも従軍し、首級ひとつをあげたことが、『国事叢記』に書かれています。



国事叢記

慶長6年の記事(左)

越前での大藤小太郎

大藤小太郎宛の慶長8(1603)年正月9日付け知行宛行状に千石の内訳が記されています。842石1斗3升が志比領今泉村において、157石8斗7升が開発村においてとあります。志比領はかつて志比荘と呼ばれていました。現在の永平寺のあるあたりです。

鎌倉時代の承久の乱後、志比荘を所領としたのが秦野にゆかりの波多野義重でした。義重は曹洞宗を開いた道元禅師をこの地に招き、永平寺の創建に貢献しています。なにやら不思議な縁を感じさせます。今泉村・開発村は現在の福井市北今泉町・東今泉町付近にあたります。北庄城からは東へ約3kmほどのところです。

屋敷地は北庄城（のち福井城）鳩の御門内に与えられました(大藤系図)。鳩の御門は漆御門とも呼ばれ、現在の北庄城址・柴田公園付近(福井市中央一丁目)にありました。百間堀南端の土橋を渡った門内には秀康の養父結城晴朝の屋敷もありました。

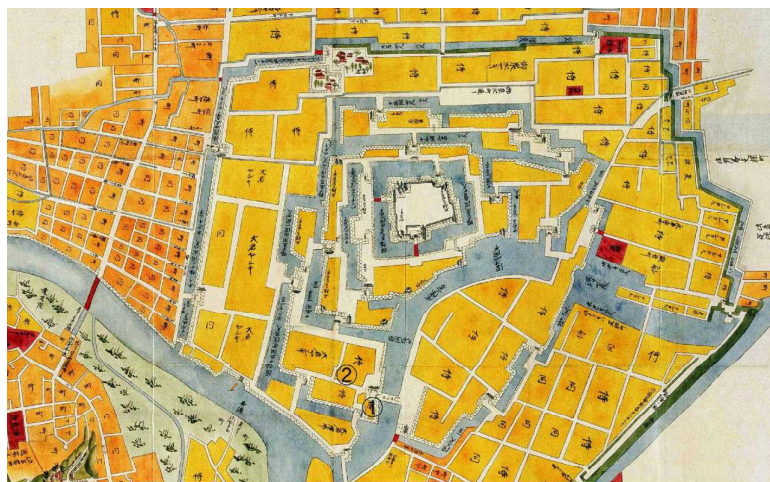
次に、越前において小太郎が与えられた役目についてみてみましょう。秀康時代の家臣団を列挙した「中納言秀康卿分限帳之写」をみると、「母衣使番」の筆頭に大藤小太郎の名があります。母衣というのは本来、武者が背中につける大きな布のことで、走るときに風でふくらみ、矢が当たらないようにする効果があるそうです。母衣は敵味方からも識別しやすいので大名家でも特に武勇の誉れある武士、あるいは本陣と前線の間を行き来する使番に着用が許されたものです。そういう母衣を着用したエリート集団を「母衣衆」と言いました。例えば、織田家では、馬廻から選抜された信長直属の使番である「黒母衣衆」と「赤母衣衆」があり、前田利家は「赤母衣」のひとりであったといわれています。「母衣使番」は経歴からみて大藤小太郎に最もふさわしい役目だったと思われます。

金三郎についての藩の記録をみると、「中納言秀康卿分限帳之写」

に、「三百石 大藤金三郎」とあり、「^{こうもんさま}黄門様(秀康)^{ごだい ごきゅうちやう}御代御 給 帳」には「相州 大藤金三郎 ^{おこしょうがしら}御小姓頭」となっています。^{さがみのくに}相模国の出身で御小姓頭を努めているということです。また後に^{へんさん}編纂された「^{えつはんしよし がん そ ゆいしよがき}越藩諸士元祖由緒書」には、改名後の名前で「大藤金左衛門信清 ^{しょうごくしれず げん な}生 国不知 元和元年^{か とく}家督」とあります。

慶長12(1607)年 ^{うるう}閏 4月、結城秀康が病死しました。享年34。67万石の跡を継いだのが ^{ちやくなん まつだいらただなお}嫡男の松平忠直です。このときまだ13歳でした。

忠直の相続から7年後の^{けいちやう}慶長 19(1614)年に、大坂冬の陣がありました。このときの^{えちぜんぜい じん だ}越前勢の陣立てをみると、総勢1万5千が11の備えに編成されています。このうち^{た が や さ こんひき}多賀谷左近率いる六番手の目付を命じられたのが大藤小太郎です(『国事叢記』)。この冬の陣で、^{ぐんれい}越前勢は軍令を待たずして、^{まえ だ としつね い いなおたか}前田利常・井伊直孝・^{とうどうたかとら}藤堂高虎らと^{さな だ まる}真田丸を攻め、^{たいはい きつ}思わぬ大敗を喫しています。越前勢の討死480とする記録もあります。このときの小太郎の働きを伝える史料は見あたりません。



越前福井城図

国立公文書館デジタルアーカイブ

①が鳩の御門(漆門)で、②のあたりに大藤小太郎の屋敷がありました。

大藤小太郎、大坂夏の陣で討死す

慶長^{けいちょう} 20(1615)年、大坂夏の陣における越前松平家の備え^{そな}をみると、大藤小太郎の名は母衣八名の中にみえ、「右八騎物見跡先^{みぎはちきものみあとさき}を下知^{げじ}す」と説明があります。息子の金三郎は「大小姓組一番^{おおごしょう}」というグループに属していました。大小姓として主君松平^{まつだいらただなお}忠直の近くにあって戦いに臨んだものとみられます。

大坂冬の陣の戦闘が1カ月半に及んだのに対し、夏の陣は、家康・秀忠父子が着陣した5月5日から大坂城が落城した7日までの3日間で決着がついています。6日の八尾・若江^{や お わかえ}の戦いでは先鋒^{せんぼう}の藤堂高虎^{たかとら い い なおたか}、井伊直孝の両隊が苦戦を強いられ大きな損害を蒙^{こうむ}りました。このとき、松平忠直は戦列に加わらず傍観していたということで家康の不興^{ふきよう}をかっています。

翌7日、汚名挽回^{お めいばんかい}をはかる忠直は、夜明け前から軍を進め、茶臼山^{ちやうすやま}に陣取る真田信繁^{しん だ のぶしげ ゆきむら}(幸村)の赤備え^{あかぞな}に対峙^{たい じ}します。前年の真田丸の戦いでは煮え湯を飲まされた相手です。この日の真田勢の攻撃はすさまじく、一時は家康の本陣も蹂躪^{じゅうりん}され、旗本^{はたちと}は逃げまどいあわやと思わせる瞬間さえあったと伝えられます。

松平忠直^{まつだいらただなお}の越前勢^{えちぜん}とはいえば、前日のこともあり、命^{いのち}を惜しまず将士共に戦場に屍^{しかばね}をさらすべしと遮二無二進撃し、大坂城一番乗りを果たします。討ち取った首級^{しゅきゅう}の数は三千七百余り。このなかには疲労困憊^{ひろうこんぱい}の状態で討たれたという真田信繁^{しん だ のぶしげ}の首級もありました。

この攻城戦の最中に、大藤小太郎は討死^{うちじに と}を遂げます。そのときの状況を記した文書が残されています。「大藤小太郎打死場之事^{うちじに ば の こと}」(大藤文書)です。日付は10月9日、宛名^{あて な}は4名で、美濃殿^{みの のどの}、主馬殿^{しゅめどの}、五郎左衛門殿^{ごろうざ え もんどの}、四人目は敬称の「殿」はつけず休也とだけ書かれています。日付の下にあるべき筆記者の名前はありません。本文の

内容は、討死^{うちじに}のとき小太郎の近くにいた2名の別当^{べっとう}（馬丁・馬の口取り）が語ったことをもとにしたものです。少々読みにくいところがありますが、次の通りです。

「惣堀^{そうぼり}から四五十間程手前に乗り付けたところで、左の腿に矢^{もも}をうけ傷を負いました。それでも一人を斬り伏せその頸^{くび}を取ったところへ新^{あらた}に敵六・七人が現れ、小太郎は右のまなこ(眼)を鎧^{やり}でつかれました。さきに小太郎が討ち取った首級^{しゅきゅう}は、深澤長右衛門^{ふかざわちやうえもん}をもって御前^{ごぜん}へさしあげました。倒した相手は銀の具足を着用しておりました。この具足につきましても深澤長右衛門にお見せしました。そのとき、小太郎に付き従っていたのは、半右衛門^{はんえもん}と二郎兵衛^{じろべえ}と申す者です。この外^{ほか}に、ちょうど引き退^のこうとしていたとき、味方二・三人が乗り付けて参りました。なお、多賀谷左近配下の鉄砲大将杉山右衛門佐^{うえもののすけ}も小太郎討死^{うちじに}の現場を目撃しております。小太郎の親類^{せつしや}というものは拙者以外にはおりません。右に記した小太郎討死^{うちじに}の状況は二人の別当^{べっとう}の証言によるものです。」

大坂城惣堀（総構^{そうがまえ}）まであと四・五十間というところで左腿^{もも}に矢をうけ、それでも敵と渡り合い一人は倒しますが、新手^{あらて}の敵に囲まれ右目を鎧^{やり}でつかれ致命傷^{ちめいしょう}を負ったということのようです。この文書を書いたのは、「小太郎には自分以外に親類はいない」と言っていることから、息子の金三郎かもしれません。



西田原香雲寺に建てられた大藤小太郎の供養墓

大坂夏の陣で大藤小太郎は討死しました。ふりかえれば、天正18(1590)年、北条氏のもとで秀吉の大軍を相手に籠城戦を戦い抜き、さらに天下分け目の慶長5(1600)年には、上杉景勝・直江兼続に属して伊達政宗とも戦いました。そしてまた、慶長20(1615)年、豊臣秀頼が籠もる大坂城を攻め、先陣きって奮戦した末の討死でした。戦国の終わりを象徴するすべての局面に関わっています。劇的で波瀾に富んだ生涯でした。

大藤系図によれば、小太郎は福井の曹洞宗孝顕寺に葬られたということです。孝顕寺は結城秀康の菩提寺として知られています。戒名は、「活巖長快居士」です。

小太郎のこの戒名は、秦野市西田原香雲寺の「大藤氏の墓」と呼ばれている墓石にも刻まれています。二基ある墓石のうち右側です。今ではだいぶ風化が進んで文字も消えかけていますが、かろうじて読める部分もあります。大原信男氏のレポートによれば、中央に「現成院殿活岩長快大居士」とあり、その左右に分けて刻まれた命日は慶長二十年五月六日と報告されていますが(「戸川の領主と現成院殿活眼長快大居士墓」秦野市史研究19)、六日は読み間違いで、七日であることは今でも目視で確認できます。これは小太郎討死の日付と一致します。

大藤系図と墓石の文字の異同についてですが、道号の「活巖」「活岩」は同音異字で、人名などでもよくみられることです。法名の「長快」は両方とも同じです。香雲寺では院殿号と大居士がつけられました。従来、この墓石は「大藤政信の墓」とされてきましたが、大藤小太郎の供養墓とみて間違いないと思います。

香雲寺には、元禄ごろに十六世住職日宣隆昇によって作られた開基位牌も祀られています。表面には「當山開基」と中央上部

にあり、右に「現成院殿活眼長快大居士」、左に「峯珠院殿傑叟林英大居士」、裏面には3行で、「天正十四乙酉歲五月廿三日源朝臣大藤式部少輔政信」「香雲寺開基 隆 昇代造」「大藤小太郎照盛」と書かれています（「香雲寺天保六年寺院取調書上帳」『秦野市史』第1巻）。

大原氏によれば、秦野市内には、横野と戸川にも同様の戒名を刻んだ供養墓が現存するそうです。道号は位牌と同じ「活眼」となっていますので、香雲寺の位牌を元につくられたとみられます。

そして、「大藤小太郎の墓」はなんと八王子にもありました。『新編武蔵国風土記稿 卷九七』多摩郡下柚木村の説明に次のようにあります。

大藤小太郎墓 馬場の内百姓藤兵衛がかまへの内にあり。小太郎は何人なりや 詳ならず。小田原北條氏の家人に、大藤式部・同新(兵)衛など云人あれば、それらの一族なるにや。村民市左衛門等は、小太郎が子孫なりと云う。されど今は氏も大室と改む。

下柚木村では、大藤小太郎がどういう人物で、なぜここに墓があるのかはわからなくなっていたようです。小太郎となんらかの関わりがあった誰かがこの地に来て墓を建てたいうことでしょうか。今となってはわかりません。近くには、滝山城主大石定久を開基とする曹洞宗永林寺（はじめは永麟寺）があります。



香雲寺大藤家の墓所 右が大藤小太郎の墓

あとがき

天正18年の小田原合戦で主家の北条氏が滅亡したのち、大藤氏の宗家を継いだ小太郎が、田原－米沢－会津－梁川－結城－北庄（福井）－大坂と長い道のりをわずかの期間に駆け抜けたことがわかりました。

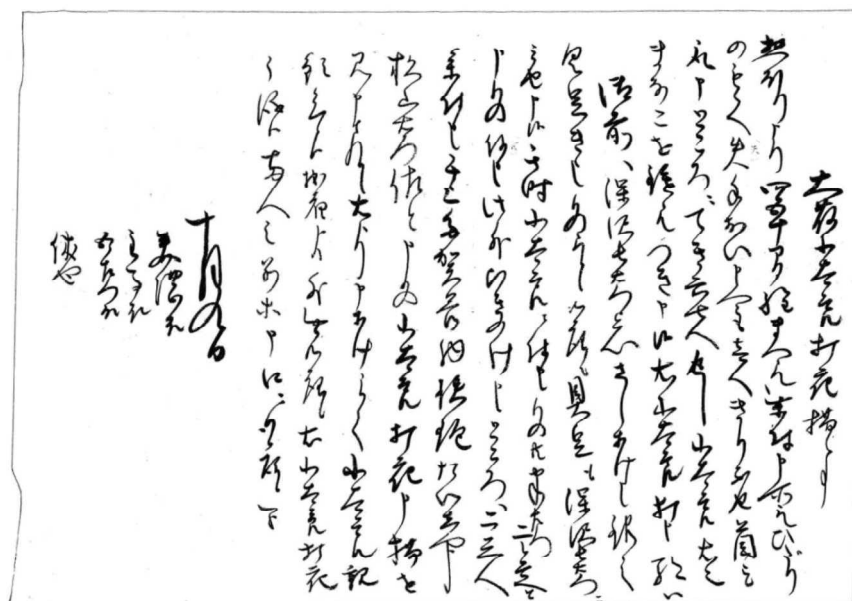
足跡をたどる過程で、小太郎と日本史上の著名な人物との関わりや時代の転換点となった重大な出来事の一端も垣間見ることができたのではないかと考えています。

論拠とした史料の中には内容の真偽などさらに検証が必要なものもあるかもしれません。読み違いや別の解釈の可能性などについても率直なご意見をいただければ幸いです。

このあとは、小太郎と故郷田原との関わりなどもう少し調べてみたいと考えています。『新編相模国風土記稿』には小太郎から香雲寺に宛てられた同寺修復について指示する書簡が掲載されています。この書簡は後北条氏時代のものと説明されてきましたが、文中に「宗樹長老(香雲寺九世大室宗樹)」の名があり、江戸初期の慶長年間に書かれたとみるのがよいと思います。小太郎はこの頃、越前にいたはずです。また、書簡には鹽叟派の伊豆における活動とか「十日市」と小太郎の関係をうかがわせる記述など興味深い内容が多く含まれています。

2026年10月

矢内昭夫



大藤小太郎打死場之事（大藤文書）

東京大学史料編纂所影写本



香雲寺鐘楼と本堂（正面奥）